

大阪高等裁判所 第14民事部 御中

平成23年1月21日  
元京都精華大学教授  
理学博士 槌田 劭

## 意見書

人は目に見えるものすら、まともに見ることができない。古来多くの賢者たちは、人の傲慢さを戒めてきた。まして見えないものの意味を理解しうるだろうか。眼光紙背というが、それは願いではあっても至難のことである。賢人たちにおいてさえそうであるならば、私たち凡人には己の愚痴をさらに強く自戒しなければならない。

地下水である。私たちは地表を流れる河川によって生活・文明が支えられていることは知っている。しかし、人の目にふれることのほとんどない地下水の意味をどれだけ知っているだろうか。

地球は水の惑星といわれ、その水のおかげで生命が存在しうる。生物生存にとって、**真水の価値は極めて大きい**。その真水はわずかであり、海水がほとんどである。真水の中でも大切なのは河川水であるが、地球の水の1万分の1%にすぎない。僅少の真水に依存して生きる点において、水のありがたさを思い、粗末にはならないのである。その河川水に比べて、**地下水は1万倍、1%賦存している**。目に見

えぬから、それを無視しがちである。しかし、文明・文化、生活にとって極めて大切である。

例をあげればきりが無い。ひとつ二つ挙げてみたい。

京都に遷都以来、1200年。街の中心、御所が東へ移動し、街は東に栄えたことはよく知られている。それは良質の地下水が北山、東山から流れ来たって、地下水を潤したからである。地下水によって、京のみやこと人びとの暮らしが支えられてきたのである<sup>①</sup>。

そして、京都は美しい庭園で知られている。その庭には石と池が配されるが、その水は泉による<sup>②</sup>。それは林泉、泉石とも呼ばれてきた。今日、庭園という表現で片づけられるが、水と人間の文化が貧しくなったということなのかも知れない。

人間の文化的な生活にとって、お酒を忘れては成立しないといわれる。伏見や灘は酒で知られるが、良質の地下水あつてのことである。その地下水が枯渇したり、汚染されることがあれば、お酒もまた消えるのであろう。今日、伏見の酒が残るのも、その地下水を守るための住民の努力があつたからのことである。昭和天皇即位に合わせて奈良電（現近鉄）が建設となった際、陸軍の敷地との関連で提示された地下鉄計画に住民運動が起つた。その結果高架へと変更され、伏見の酒が守られた。生きて利用される地下水とそれを守る行政の良識が伏見の酒を守つたのであつた<sup>③</sup>。

ものごとは目に見えてさえ危ないのに、見えなくなつてはとりかえしがつかない。川が暗渠になつたとき、その水は腐る。地下水が飲み水として使われることは水を

守る上で極めて大事なこと、と言わざるをえない。利用されず、住民が無関心となったとき、取りかえしのつかぬ事態となる。見えないものにこそ、心を配る慎重さが求められている。

---

#### 注釈

- ① 槌田 劭、嘉田由紀子共編「水と暮らしの環境文化—京都から世界へつながる」（2003/03 昭和堂）38頁
- ② 同書 57頁
- ③ 同書 46頁

#### 経歴等

1935年 京都生まれ

住所 京都府宇治市木幡南山

1963年 京都大学大学院修了（理学博士）

京都大学工学部助教授を経て2004年まで京都精華大学教授（環境社会学）

その間、1973年に「使い捨て時代を考える会」設立。生活と環境問題に取り組む。理事長を経て、現在 相談役。

#### 主な著書

「共生共貧—21世紀を生きる道」（2003/10 樹心社）

「地球をこわさない生き方の本」（岩波ジュニア新書）（1990/08岩波書店）など。

---